

氏名(国籍)	南 富 鎮 (韓 国)		
学位の種類	博士(学 術)		
学位記番号	博 甲 第 1,984 号		
学位授与年月日	平 成 11 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	昭和文学の朝鮮体験		
主 査	筑波大学教授		池 内 輝 雄
副 査	筑波大学教授		犬 井 善 壽
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学助教授		新 保 邦 寛
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	竹 村 牧 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

(研究主題)

本論文は、昭和戦前期における日本文学（日本語で書かれ、日本あるいは日本統治下の朝鮮で発表された作品）が、「朝鮮」（風土・風物はもとより、政治・経済・社会・文化などを含む総合体としての名称）をいかにとらえたかという問題を実証的に研究し、日本文学史・文化史の再評価を提言するものである。

(研究対象)

このため、本論文では上記の研究の対象として、同時期に作品発表をした日本人作家である中島敦、湯浅克衛、田中英光の3名と、朝鮮人作家である金史良、李石薫（日本名・牧洋）、張赫宙の3名をとりあげる。日本人作家は朝鮮で幼少時代を過ごし、その経験に基づいて作品を執筆したという共通点を持ち、朝鮮人作家は日本語で作品を書くことや「創氏改名」（日本名への改名）を強いられたという共通点を持つ。

(研究方法)

本論文での研究の方法は、上記の作家および文学について歴史・社会・文化などの諸状況を視野に収めながら作品分析を行い、作品の構造や作家の創作意識などを明らかにしようとするものである。

(研究内容)

以下、著述の順序に従って第1章より第7章までの内容を概説する。

第1章「序論」は、本論文の研究主題、および第2章以下の各論の概要を提示したものである。

第2章「中島敦文学と異郷としての朝鮮」は、中島敦の初期の草稿あるいは習作について新たな考察を行うものである。中島敦は少年時から中学校卒業にかけて朝鮮で過ごし、その経験に基づいて第一高等学校、東京大学在学中に『巡査のゐる風景——九二三年の一つのスケッチ』（第一高等学校「校友会雑誌」1926）、『プールの傍で』、『虎狩』、『北方行』などを書いた。これらの作品は、先行論文ではもっぱら後年の作品の中心主題につながる自意識（自己意識）の所在、形成過程を確認するという目的のために取り上げられることが多かった。著者は、これらの作品に描かれた複数の朝鮮人の姿に着目し、単に自意識の問題だけでなく、日本人対朝鮮人の民族的な意識の相違を明らかにしている。

第3章「金史良文学と植民地という制度」は、金史良が日本語で発表した初期作『光の中に』（1939）、『天馬』（1940）、『光冥』（1941）、『親方コブセ』（1942）について（第1節）、「白々教事件」を扱った問題作『草探し』（1940）、『太白山脈』（1943）について（第2節）論及する。金史良は平壤に生まれ、佐賀高等学校を経て東京

大学独文科に進学した英才だが、朝鮮の下層民衆の悲惨な実態や日本在住の朝鮮人の民族意識・被差別意識を作品化するところから作家活動を始め、昭和十年代の時代状況の下で、最も先鋭に日本と朝鮮の問題を追及した。著者は、歴史的資料を丹念に調査し、作品分析と合わせて作家の創作意識、問題意識をえぐり出している。

第4章「湯浅克衛文学の植民地空間」は、少年時、朝鮮の水源で過ごし、その体験に取材した『カンナニ』（1935）、『焔の記録』（1935）で作家として出発した湯浅克衛の文学を論じたものである。ここでは「水源」という特別な場所の持つ空間的な意味をとらえ、物語内容との相関を跡づける。先行論文では、湯浅克衛は「植民地一世」を称賛した作家、あるいは「転向」作家と見なされていたが、著者は、それらをしりぞけ、湯浅克衛の豊かな想像力、反国策文学性などを指摘している。

第5章「田中英光文学と牧洋という鏡」は、田中英光の作品『碧空見えぬ』（1934）に描かれた李石薫（牧洋）の姿と、モデルとなった洋牧の『静かな嵐』（1941～43）とを比較検討するものである。著者は、両作をいわば合わせ鏡のように用いながら、日本作家と朝鮮作家の時代状況に対応する意識の格差を明らかにしている。

第6章「張赫宙文学と近代の挫折」は、先行論文が張赫宙を親日か反日か、外来主義か民族主義かといった範疇でしかとらえてこなかったことに反論し、「近代」と「反近代」という新たな範疇を設定し、この面から張赫宙を再検討、再評価することを試みたものである。著者は、張赫宙が精神形成期に「近代」を志向し、その方向へと進んだが、同時にそれは日本的なものに限りなく接近し、それに収斂することであったと推論し、そのことは同時に「朝鮮」が近代においてたどった道と重なりと結論する。

第7章「結論」は、以上の考察の上から、「朝鮮」体験を軸に、日本と朝鮮の作家の個々の問題を浮彫にすることを通じて日本近代の抱えた歴史・文化の問題や日本・朝鮮の民族意識の問題を明らかにしたことを確認するものである。

審査の結果の要旨

本論文は、昭和戦前期における日本が植民地「朝鮮」といかにかわり、それをどのようにとらえてきたかを文学作品の上から考察したものである。ここに取り上げられた作家・作品の中にはすでに個別的な研究が進んだものもあるが、本論文はそうした個別論を踏まえ、かつ独自の観点から作家・作品を複合的、総合的にとらえることを試みており、評価できる。

以下、各章に関して審査の概要を記述する。

第2章で著者は、中島敦の習作群を対象に、日本人の語り手（登場人物）の語りを通して浮かび上がる朝鮮人の「巡查」、「売春婦」の存在に注目し、彼らの意識構造を分析し、先行論文が語り手の意識構造の分析にのみ終始してきた欠点を指摘した（第1節）。また、朝鮮の民間伝承を手掛かりに「虎」のイメージを明らかにし、『虎狩』の作品構造、特に支配階級に属する朝鮮少年の日本人と朝鮮民衆の間に揺れ動く心理をとらえた。また、それが後年の代表作『山月記』に継承されることを指摘した（第2節）。ともに新見として評価できる。

第3章で著者は、金史良の日本文壇登場作にすでに朝鮮人の被差別意識や「創氏改名」の問題が顕在することを確認し、さらに『天馬』以下では、作家の、日本語で書くことに対する批判の姿勢を指摘し、先行論文の欠陥を補った（第1節）。また、『草探し』に関して当時の宗教政策や事件などについての歴史資料を博捜し、この作品が、植民地支配と民族の特質である「暗黒意識」とによって、独特な民族意識の生成されるさまを描き出したものとする考察を行い（第2節）、説得力のある論を構築した。

第4章で著者は、湯浅克衛の、これまでほとんど論じられることのなかった初期の作品『カンナニ』、『城門の街』（1936）、『望郷』（1938）、『葉山桃子』（1939）、エッセイ『心田開発』（1937）について周的な分析を行い、「水原」という街の空間の意味、日本人移民者の故郷意識、「心田開発」（「敬神愛国」の精神の涵養と農村の振興を図った日本政府の施策）への批判などを明らかにし、新たな作家・作品像を提出した。

第5章で著者は、田中英光と牧洋とを比較検討したが、論の方法には独自の工夫が見られるものの、田中英光の作品に関する分析が一面的であり、やや説得力に欠ける憾みがある。

第6章で著者は、張赫宙がこれまであまり論じられることがなく、しかも論じられるさいには「親日作家」・「国家作家」として概括されることについて、イデオロギーによる批判の危険性を押し、歴史的・民族的な問題を総合させた理解の方向を提唱した。この章は、本論文の総まとめ的な役割も持ち、「近代」・「近代化」をめぐる問題について、文学史のみならず、社会・文化史上からの考察を行い、説得力ある結論を導いた。

本論文の短所は、その対象が昭和戦前期の文学作品に限定されていることで、問題をより深化・総合化させるためには、明治・大正・昭和戦後期など、広範な時代の文学作品への目配りが必要と思われる。また、より徹底した調査、分析の方法も要求される。これらは著者の今後の課題である。とはいえ、総じて、本論文は、学際的・総合的な見地から文学・文化の問題をとらえ、先行論文を越える多くの新見を提出した力論といえる。既にその一部が全国的な学会誌に掲載を予定されるなど、本論文が学界に寄与するところは大きいと判断する。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。